

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 15 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520522

研究課題名(和文) 18世紀ドイツの書きことばにおける口語性の機能 社会語用論的・言語意識史的研究

研究課題名(英文) The function of orality in the written German of the 18th century. A sociopragmatic and metalinguistic study

研究代表者

高田 博行 (Takada, Hiroyuki)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：80127331

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：1750年頃にドイツ語圏全域で高地ドイツ語文章語の受け入れが完了したあと、18世紀末には、教養人は公的場面ではできる限り標準文章語に近い話し方をすることが好ましいという意識をもった。方言と標準文章語とが言語接触した結果として都市で「日常語」が生まれ、これが標準文章語の平準化を促した。硬直的で形式的な傾向のあった標準文章語が日常語という形で話しことば化して柔軟性を得た。この標準文章語の平準化は、18世紀後半に親称のduの使用範囲が大幅に拡大したことと同じ脈絡で説明ができる。

研究成果の概要(英文)：After the final acceptance of the High German Written Language in the overall German-speaking area about 1750, learned people had the conception that they should speak in official situations just as they wrote. The urban colloquial German as a result of language contact of the standard written language and dialects promoted the flattening of standard written German: The standard language with its tendency to rigidity and formality acquired its flexibility through the spoken colloquial German. This process of leveling standard language can be explained in the same context as the increasing usage of the informal addressing pronoun "du" in the second half of the 18th century.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：研究者交流 ドイツ語史 言語規範 標準語 方言 日常語 ポライトネス 言語接触

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究のように過去におけるコミュニケーションのあり方を社会的コンテクストとの関連において考察する観点、ドイツ語史研究において1980年代以降とくに重要視されてきている。この立場をP. von Polenz (1991)は、「社会語用論的」(soziopragmatisch)言語史研究と名づけた。この「社会語用論的言語史研究」は、E. C. Traugottに代表されるような、話者が表現する非字義的な意味に基いて言語変化を研究するアプローチと並ぶ、歴史語用論の一部門を成すと同時に、J. MilroyやS. Romaineに代表されるような「歴史的社會言語学」と重なっている。

(2)K. J. Mattheier (1995)は、「社会コミュニケーション史」を記述するには、社会語用論的な観点(彼の用語では「言語使用史」)に加えて、他言語との交流を見る「言語接触史」と、言語形式がもつ社会的意味を話者・書き手の視点から再構成する「言語意識史」という観点が必要であることを提唱した。本研究はこのMattheier (1995)の提案に依拠して、社会語用論(「言語使用史」)と言語意識史との両面から、18世紀における口語性の社会的機能に迫るものである。

2. 研究の目的

本研究は、18世紀のドイツ語史の進展を、「標準文章語」への規範化(言語の垂直化)という観点からではなく、規範からの逸脱(言語の水平化)という観点から捉える。その際、「日常語」という概念を社会的コンテクストとの言語的インターフェイスと見なして、当時の「日常語」をめぐる言説を分析することによって、「口語化」による標準ドイツ語の水平化(平準化)には、どのような社会的機能もしくは社会的意味があり、それが話し手・書き手の言語意識とどのように関連していたのかを探る。

3. 研究の方法

18世紀ドイツにおける口語性に関わる言説、とりわけ「日常語」に関わる言説を収集し、機械可読のデジタルデータとして蓄積し、「18世紀ドイツ語口語性言説コーパス」を作成する。そのコーパスを統計的に分析することで、口語性に関わるキー概念を抽出し、それを軸にして口語性に関する当時の書き手の言語意識を再構成し、「日常語」の社会的機能を追求する。

研究を進めるに際して、「口語性」とは何を指すのかを明確にしておかねばならない。Koch/Oesterreicher (1985)は、書きことばと話しことばを単純な2分法とはみなさず、音声か文字かという「メディア」の観点と、「近いことば」か「遠いことば」という「コンセプト(了解事項)」の観点とを峻別する。「近いことば」は典型的には私的場面に関わり話しことば的であり、「遠いことば」は公的場面に関わり書きことば的である。本研究では、この「近いことば」性という概念で口語性を理解する。

4. 研究成果

(1)「18世紀ドイツ語口語性言説コーパス」を作成し分析すると、「書簡」、「交際」、「方言」、「生活」、「低地ドイツ語」、「柔軟」、「親密」、「歓談」などの、口語性に関わるキー概念が抽出できた。そしてとりわけ、低地ドイツ(北ドイツ)における言語事情が、本研究にとって重要であることがわかった。ハンザ同盟の衰退と並行して、低地ドイツでは低地ドイツ語による文章語(ハンザ語)の地位が低下し、低地ドイツの公官庁や社会的上層は16世紀になると、書記言語として低地ドイツ語に代えて高地ドイツ語の文章語を採用し始め、17世紀半ばまでに低地ドイツでは公的な書記言語として高地ドイツ語が低地ドイツ語にとって代わった。

(2) このあと高地ドイツ語の文章語は、1750年頃にドイツ語圏全域で受け入れが完了する。そして18世紀末には、教養人は公的場面ではできる限り標準文章語に近い話し方をすることが好ましいという意識をもっていた。私的場面では方言的要素を放棄しないが、公的場面では標準文章語に近い話し方をする教養人には、口頭レベルのダイグロシア（二言語併用）が存在したことになる。とりわけ低地ドイツでは公的場面において書籍に書いてあるとおり発音をすることが実践され、その結果、この低地ドイツにおける文字に忠実な発音が模範的発音としての地位を獲得していった。

(3) ハノーファーの出身である作家のモーリッツ（K. Ph. Moritz）は、1778年にプロイセンの首都ベルリンにやってきて、ベルリンという大都市の教養人たちが想像以上に低地ドイツ語の方言的要素を多く交えて話していることに驚き、1781年にこの教養人たちのことばについての観察を書き留めた。ベルリンの教養人は、講演などの「公的なスピーチ」では標準文章語に近づけて話しているが、標準文章語と方言と混交した「社交的な会話」においては方言に寄せて話しすぎていることをモーリッツは指摘した。

(4) 教育学者ゲーディケ（F. Gedike）は1794年に、標準ドイツ語の日常語は不自然で硬直しているのに対して、低地ドイツ語の日常語には「柔軟さ」が備わっていると見た。この特徴づけは、低地ドイツ語的な要素を方言や低い社会的階層や低い文体として査定するのではなく、「近いことば」として捉えていると解釈できる。その場合、「柔軟さ」は「近さ」の言い換えであることになる。

(5) ゲーディケはまた、当時、社会的地位に応じて5種類もあった（ひとりの相手を指す）呼称代名詞の体系を「硬直した、厳密で、肩ひじ張った」ものとみなし、「ことばから生彩を奪っている」見た。そこで、ゲーディケは、

duとSieの2種類の呼称代名詞があるだけで事足りるという、この時代の傾向に合致した提案を行った。18世紀末のドイツでは、社会階級ではなくて人間関係を重視する言語意識が急速に強まった。相互が内的に認め合う自主的な人間関係の構築に基づく「友情」が重要視された。今やゲルマン時代からの素朴なduが再評価され、友人には書簡でduという「近いことば」で呼ぶことが一般化した。このようにして19世紀には、実際にduとSieという2種類の呼称代名詞に縮約され、整理されていく。

(6) 1800年をまたいで都市化が進むなか、種々の公的場面に参加する機会および学校教育を受ける機会を得た一般大衆は、標準文章語を獲得する。そのことにより、硬直的で形式的な傾向のあった標準文章語が日常語という形で話しことば化し柔軟性を得た。標準文章語が「近いことば」化した現象を、標準文章語の平準化と呼んでおこう。この標準文章語の平準化の進展は、親称のduの使用範囲が大幅に拡大したことと同じ脈絡で説明ができよう。これは、1800年頃を境にして（相手との距離をとる）ネガティブポライトネスから（相手との距離を縮める）ポジティブポライトネスへ移行したことを示唆するひとつの重要な現象である可能性がある。日常語を、公的な「遠いことば」と私的な「近いことば」との間の緩衝材と捉えてみよう。ひとは、「遠いことば」と「近いことば」との間の座標軸上の位置で書きことば性と話しことば性の程度を調整できる日常語を、多種多様な場面（私的・公的場面、そして半私的・半公的場面など）に合わせて使用し、そのことによってポライトネスを制御できた。大都市ベルリンにおいて日常語が際立ったのは、まさに都市化にともなう日常生活の多様化のなかで、公私のことばに微妙な濃淡を与える必要があったからであろう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 17件)

高田博行「ドイツの魔女裁判尋問調書(1649年)に記されたことば 裁判所書記官の言語意識をめぐって」、『歴史語用論の世界 文法化・待遇表現・発話行為』(金水敏・高田博行・椎名美智編)、査読有、ひつじ書房、2014、105-132頁。

細川裕史「文章語に取り込まれた『近いことば』の頭語レベルにおける特徴—書簡体小説『若きウェルテルの悩み』を一例として」、『ドイツ文学論攷』(阪神ドイツ文学会)、査読有、第55号、2014、51-68頁。

細川裕史「ナチズムの言語をめぐる言語意識 V. Klemperer の『第三帝国の言語』(1947)に基づく一考察」、『研究論集』(学習院大学ドイツ文学会)、査読有、第18号、65-83頁。

高田博行「『正しい』ドイツ語の探求(17世紀) 文法家と標準文章語の形成」、『ドイツ語の歴史論(=講座ドイツ言語学第2巻)』(高田博行・新田春夫編著)、査読有、ひつじ書房、2013、199-223頁。

高田博行「書きことばと話しことばの混交(18世紀) 『日常交際語』という概念をめぐって」、『ドイツ語の歴史論(=講座ドイツ言語学第2巻)』(高田博行・新田春夫編著)、査読有、ひつじ書房、2013、225-247頁。

Hiroyuki Takada, Entfernte Vorbilder. Die deutsche Sprachgeschichte und die Diskussion von 1868-1945 um die japanische Nationalsprache und -schrift. In: Muttersprache. Vierteljahrsschrift fuer deutsche Sprache (Wiesbaden), 査読有、Vol. 123, 2013, pp. 219-239.

細川裕史「大衆紙のドイツ語(18世紀) 三月革命は書きことばを大衆に届けたか?」、『ドイツ語の歴史論(=講座ドイツ言語学第2巻)』(高田博行・新田春夫編著)、

査読有、ひつじ書房、2013、249-272頁。

Hirofumi Hosokawa, Abschied vom katechetischen Auswendiglernen. Eine Fallstudie zur Didaktik um die Wende zwischen dem 18. und 19. Jh. am Beispiel des geistlichen Schulreformators Gustav Dinter, 『研究論集』(学習院大学ドイツ文学会)、査読有、第17号、2013、165-178頁。

高田博行「ライブニッツによるドイツ語改良のシナリオ 思想史と言語史の交点」、『ライブニッツ読本』(酒井潔・佐々木能章・長綱啓典編)、査読有、法政大学出版局、2012、145-155頁。

Hiroyuki Takada, Umgangssprache' in der zweiten Haelfte des 18. Jahrhunderts. Eine sprachbewusstseinsgeschichtliche Annaeherung an einen Schluesselbegriff. In: Peter Maitz (ed.) Historische Sprachwissenschaft. Erkenntnisinteressen, Grundprobleme, Desiderate. 査読有、Berlin and New York: de Gruyter, 2012, pp. 169-199.

Hiroyuki Takada, Hochdeutsch und Niederdeutsch bei Schottelius. In: Wolfenbütteler Barock-Nachrichten (Wiesbaden), Vol. 39, Die vielen Gesichter des Justus Georg Schottelius. Gesammelte Beiträge aus Anlass der 400. Wiederkehr seines Geburtstages am 23. Juni 1612, 査読有、2012, pp. 25-34.

Joachim Scharloth/ Noah Bubenhofer, Datengeleitete Korpuspragmatik: Korpusvergleich als Methode der Stilanalyse. In: Ekkehard Felder/ Marcus Mueller/ Friedemann Vogel (eds.): Korpuspragmatik. Thematische Korpora als Basis diskurslinguistischer Analysen von Texten und Gesprächen. 査読有、Berlin, New York: de Gruyter. 2012, pp. 195-230.

Noah Bubenhofer/ Joachim Scharloth, Korpuspragmatische Analysen alpinistischer Literatur. In: Travaux neuchâtelois de linguistique (TRANEL), 査読有、Université de Neuchâtel. 2012, pp. 241-259.

高田博行 「敬称の筈に踊らされる熊たち - 18世紀のドイツ語呼称代名詞」、『歴史語用論入門』（高田博行・椎名美智・小野寺典子編著）、査読有、大修館書店、2011、143-162頁。

高田博行・小野寺典子・椎名美智 「歴史語用論の基礎知識」、『歴史語用論入門』（高田博行・椎名美智・小野寺典子編著）、査読有、大修館書店、2011、5-44頁。

高田博行 「国語国字問題のなかのドイツ語史 - なぜドイツの言語事情が参照されたのか」、『言語意識と社会 - ドイツの視点、日本の視点』（山下仁・渡辺学・高田博行編著）、査読有、三元社、2011、167-196頁。

ヨアヒム・シャルロート 「言語意識と文化分析の言語学」、『言語意識と社会 - ドイツの視点、日本の視点』（山下仁・渡辺学・高田博行編著）、査読有、三元社、2011、251-278頁。

〔学会発表〕(計 5件)

高田博行 「1800年前後のベルリンにおける標準文章語と方言の混交 緩衝材としての「日常語」」、日本言語学会第148回大会、シンポジウム「過去のコミュニケーションを復元する - 書き言葉と話し言葉をめぐる三都物語 - 」、2014年6月8日、於：法政大学。

Hirofumi Hosokawa, Die Mikro- und Makrostruktur der ersten deutschen illustrierten Zeitung、日本独文学会秋季研究発表会、シンポジウム V "Sprache an medial-technischen Schwellen-Die

Sprache ändert sich, aber wie?」、2013年9月28日、於：北海道大学。

細川裕史 「書きことばに取りこまれた『近いことば』の文構造 書簡体小説『若きウエルテルの悩み』を一例として」、社会と行為から見たドイツ語研究会、第21回研究会、2013年3月9日、於：学習院大学。

Joachim Scharloth, Datengeleiteter Kernwortschatz Deutsch. Prinzipien der Berechnung anhand sehr grosser Korpora. 日本独文学会秋季研究発表会、2011年10月15日、於：金沢大学。

高田博行 「『言語意識と社会』の歴史性について」、社会と行為から見たドイツ語研究会 第18回、2011年10月1日、於：学習院大学。

〔図書〕(計 4件)

金水敏・高田博行・椎名美智編 『歴史語用論の世界 文法化・待遇表現・発話行為』ひつじ書房、2014、全297頁。

高田博行・新田春夫編 『ドイツ語の歴史論 (= 講座ドイツ言語学第2巻)』ひつじ書房、2013、全295頁。

高田博行・小野寺典子・椎名美智編 『歴史語用論入門 過去のコミュニケーションを復元する』、大修館書店、2011、全241頁。

山下仁・渡辺学・高田博行編 『言語意識と社会 ドイツの視点・日本の視点』三元社、2011、全287頁。

〔産業財産権〕
出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 博行 (TAKADA, Hiroyuki)
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：80127331

(2) 研究分担者

シャルロット、ヨアヒム
(SCHARLOTH, Joachim)
獨協大学・外国語学部・准教授
研究者番号：70585786
(平成23年度～24年度)

細川 裕史 (HOSOKAWA, Hirofumi)
学習院大学・文学部・助教
研究者番号：60637370
(平成24年度～25年度)

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

芹澤 円 (SERIZAWA, Madoka)
学習院大学・大学院・人文科学研究科
博士課程

田中翔太 (TANAKA, Shota)
学習院大学・大学院・人文科学研究科
博士課程

佐藤 恵 (SATO, Megumi)
学習院大学・大学院・人文科学研究科
博士課程
(平成24年度～25年度)

以上